

## 『海録』諸版とその系譜

田野村忠温

**要旨**：19世紀初期の中国で著された謝清高口述、楊炳南筆録『海録』（1820（嘉慶25）年原刊）には諸版があるが、従来の研究はそれをただ列挙するだけで、諸版がどのような派生の関係にあるのか、どの版の信頼性が高いのかといった問題を考えようともしていない。この小論では、『海録』の現存する諸版の観察と分析に基づいてそれらの問題に解決を与える。

**キーワード**：『海録』 謝清高 楊炳南 関大・阪大本版

### 1 はじめに

『海録』は中国人の世界周遊に基づく最初の地理著作として知られる。海難に遭い、西洋人の船に救助された謝清高（1765～1821（乾隆30～道光1）年）がその後世界の各地を回り、その見聞を1820（嘉慶25）年に楊炳南が筆記して書籍化したものとされる。その記述が全面的に謝清高の体験によっているわけでもなければ、真の筆記者は誰だったのかということが論じられることもあるが（馮(1937)、饒(1937)、周(1983)、邱(1986)、井上(1986)など）、それらの問題はここでの関心事項ではない。

この小論の課題は、『海録』の版の種類とその相互関係の解明である。筆者は近年19世紀の中国語に関わる考察において『海録』における表現や表記の用例に言及する機会が何度かあった（拙論(2019, 2020, 2021a, 2021b)）。しかし、その際に関連の研究を確かめてみても、『海録』にいくつかのどのような性質の版があり、どのような派生の関係にあるのか、原刊版は現存するのか、どれが最も信頼できる版なのかといったことを明らかにしたものはなかった。

本小論では『海録』の諸版とその系譜に関する筆者の調査と分析の結果を述べる。

### 2 従来の記述

『海録』に関する最初の研究書である馮注釈(1938)は、文中に現れる各種の地名に関する考証を述べた労作である。馮は『海録』の版の種類については次のように述べている。

謝清高海録原刻本頗罕覩。今所見本有海外番夷録本。海山仙館叢書本。別有舟車所至本。小方壺齋輿地叢鈔本。頗多刪節。檢光緒嘉應州志。知尙有呂調陽重刻本。謝雲龍重刻本。此二本今亦未見。（謝清高『海録』の原刊版は稀覯本である。現在見られる版には海外番夷録本と海山仙館叢書本がある。ほかに舟車所至本と小方壺齋輿地叢鈔本もあるが、原文を大幅に省いている。『光緒嘉應州志』を見るとさらに呂調陽重刻本と謝雲龍重刻本があることが知られるが、この2つは未見である。）

ここには本小論の関心からすれば確認を要する3つの問題がある。その第1は、『海録』の原刊版が現存するのかどうかということである。「頗罕覯」(まれにしか見られない、稀覯本である)という言い回しはわずかなりとも存在することを表すはずであるが、おそらく馮はそれを見たことがないがどこかにあるかも知れないということをそのように表現したのであろう。第2は、列挙された海外番夷録本、海山仙館叢書本、舟車所至本、小方壺齋輿地叢鈔本、呂調陽重刻本、謝雲竜重刻本がそれぞれどのような性質を持ち、原刊版に対して、また、相互にどのような関係にあるのかということである。そして、第3は、馮の挙げた諸版ですべてが尽くされているのかということである。

周(1983)も馮と同様に原刊版は「頗罕見」であるとし、しかし、かつて北京の燕京大学図書館にあったとする。同館の館蔵目録にその記載があると周は言うが、現物を確認できないことにはそれが実際に原刊版であったかどうかは分からない。蔣・方主編(1993)は原刊版について「今不可見」と述べ、現存する最も早い刊本は「1842年(道光壬寅)刻本」とする。

馮注釈(1938)に続く、『海録』を主題とする研究書が21世紀に入ってから2点出版されている。安校積(2002a)とSchwarz(2020)がそれである。<sup>1</sup>しかし、時代が進んで資料調査の条件が格段に改善したにもかかわらず、『海録』の諸版に関する記述の水準はいずれも1世紀近く前の馮のそれからほとんど進歩していない。安は次のように述べている。

楊炳南編著本が最も早い刊本。刊行時間大约在1820年或稍晚，是清代刊本中的全本，其余刊本大多对杨炳南编著本进行了删节、改写、改编。中国社会科学院近代史所图书馆有杨炳南序本。(中略)杨炳南编著本无目录，不分卷，无小标题，前后无刊刻年代及书坊名。(楊炳南編著本が最も早い刊本である。刊行時期は1820年かそれよりも少し遅い時期であり、清代刊本中の完全な本である。ほかの刊本は大部分が楊炳南編著本に対して省略、書き換え、改編を施している。中国社会科学院近代史所図書館に楊炳南編著本がある。目次はなく、複数の巻に分かれておらず、標題もない。板刻出版の年代や出版社名も記されていない。)

この記述に関する最大の疑問は、中国社会科学院近代史所図書館にあると言うその「楊炳南編著本」に出版年が書かれていないのになぜそれが最も早い刊本で、1820年ごろに出版されたと言えるのかというものである。単に、『海録』の成書、出版に関する既知の情報——楊炳南が序文で1820(嘉慶25)年に執筆したことを述べ、林則徐の上奏文「查明外国船隻騙帶華民出国情形摺(道光十九年七月二十四日)」(沈主編(1986)所収)に「嘉慶二十五年在粵刊刻」(嘉慶25年に広東で出版された)という記述がある<sup>2</sup>——に頼って想像しただけではないのか。歴史的文献のしかも原刊版かどうかの問題となるものの議論はもっと慎重に行われなければならない。<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 安には関連の論文として安(2002b, 2003)がある。

<sup>2</sup> 林則徐の上奏文における記述の存在は陳(1980)を通じて知った。

<sup>3</sup> 安の使う「楊炳南編著本」という用語も適切ではない。楊炳南の序文を巻頭に持つ『海録』の版は

安は『海録』の版の1つとして魏源の『海国図志』を挙げている。しかし、『海国図志』は『海録』から多数の章節を引用してはいるものの、『海録』を複数の引用源の1つとしているに過ぎない独立した別個の書籍であり、『海録』の版として数え得るものではない。

安はさらに現代の翻字版や馮注釈(1938)をも『海録』の版に含め、Schwarz(2020)も同様に安校積(2002a)や日本における和刻本や写本までを含めてそれらを列挙している。<sup>4</sup> いかなる範囲のものを『海録』の版と見るかは所詮版の定義の問題であるが、いずれにせよ『海録』に関する理解を深めるためには、諸本をただ数え上げるのではなく、いくつものどのような性質の版があるかを見定め、それらが派生上どのような関係にあるかを明らかにすることが必要である。

### 3 『海録』の版の種類

筆者の確かめることのできた『海録』の諸本を後述の分析に基づいて分類、整理した結果を表1に示す。ここには、『海録』の版の問題を考えるうえで意味の乏しいもの——具体的には、現代の翻字版や注釈書、和刻本、写本、『海国図志』——は含めていない。背景を暗くして加えてあるのは筆者未見の版である。

表1 『海録』の諸版

	版名	単行本/叢書本の別	出版年	扉の書名		序文		地図	確認した本
				『海録』	その他	楊炳南	その他		
全文版	[全1] 関大・阪大本版	単行本(推定)	不明	無	無	有	無	無	関西大学図書館蔵本 大阪大学附属図書館蔵本
	[全2] 域外叢書版	叢書本	1842	—	域外叢書(叢書扉)	有	王塗(叢書序)	1葉	京都大学文学研究科図書館蔵本
				有(篆書)	無				京都大学附属図書館蔵本
				—	不明				台湾学生書局刊影印本(1975年)
	[全3] 海外番夷録版	叢書本	1844	—	海外番夷録(叢書扉)	有	王塗(叢書序)	無	吉林省図書館蔵本
									—
	[全4] 海山仙館叢書版	叢書本	1851	有	—	有	葉志詭(叢書序)	無	国立国会図書館蔵本
	[全5] 謝雲竜序本版	単行本	1881	不明	—	不明	謝雲竜	不明	未見
	[全6] 小方壺齋輿地叢鈔版	叢書本	1891	—	小方壺齋輿地叢鈔(叢書扉)	有(節録)	王錫祺(叢書序)	無	大阪大学附属図書館蔵本
	[全7] 中外地輿図説集成版	叢書本	1894	—	中外地輿図説集成(叢書扉)	有(節録)	邵濟川(叢書序)	無	東京都立図書館蔵本
[全8] 上下巻本版	単行本	不明	有	—	有	無	無	ハーバード大学燕京図書館蔵本	
[全9] 巾箱本版	単行本	不明	不明	—	不明	不明	不明	未見	
増補版	[増1] 海国紀聞	単行本	1840ごろ?	—	海国紀聞(推定)	不明	不明	不明	『紅毛番暎晴考略』『防海輯要』での引用など
節録版	[節1] 舟車所至版	叢書本	1843	—	舟車所至(叢書扉)	無	編者	無	早稲田大学図書館蔵本
			1850						文海出版社刊影印本(1978年)

『海録』の諸本はその性質上2つの観点から分類することができる。まず、本来の『海録』

複数あり、それでは版を一意的に特定することができない。

<sup>4</sup> Schwarz(2020)における『海録』諸版の記述は同書の編者 Martin Hanke による。

の全文を(ほぼ)そのまま収録したと考えられるもの(「全文版」)、『海録』の全文を使いつつ、それに大幅な編集や増補を施したもの(「増補版」)、『海録』の内容を大幅に縮約して収めたもの(「節録版」)の3種類が認められる。加えて、その『海録』が単独で出版されたのか(「単行本」)、それとも、地理叢書類の一部として出版されたのか(「叢書本」という区別もある。扉などを欠く場合には単行本と叢書本の関係が不明瞭になるが、内容の確認に基づいてある程度のことは推定することができる。

表1に示した各版について以下に説明を加える。安校積(2002a)は中国社会科学院蔵本以外は多く短縮や改編が施されているとするが、何種類もある全文版の内容はすべて共通である。

## (A) 全文版

### 1) 関大・阪大本版

『海録』の1820(嘉慶25)年の原刊版であると確実に判定できるものは筆者の確認の範囲にはない。原刊版であるか、もしくは、それに最も近い版であると推定されるのは、表に[全1]と記した関西大学図書館増田渉文庫蔵本と大阪大学附属図書館蔵本である。関西大学蔵本には楊炳南の序文があり、大阪大学蔵本にはそれがない。関西大学蔵本は大阪大学蔵本や[全2]、[全3]の諸本に比べて判型が26.9cm×15.4cmと一回り大きく——内框郭はいずれも17cm×12cm内外——、外観上も品質が高い印象がある。両本とも扉はなく、出版年は分からない。原刊版である可能性もあるが、それを断定できるだけの証拠はなく、以下で見る[全2]や[全3]の諸本との区別を示す明確な特徴もないので、「関大・阪大本版」と呼ぶ。

安校積(2002a)が1820年ごろに出た最も早い刊本であると言う中国社会科学院近代史所図書館蔵本の版はその内容を確かめてみないことには分からない。ことによっては関大・阪大本版であるかも知れないし、さらに新しい[全2]などである可能性もある。<sup>5</sup>

### 2) 域外叢書版

[全2]の「域外叢書版」は王蘊香の編んだ『域外叢書』(1842(道光22)年)という地理叢書にその一部として収められたものである。<sup>6</sup> 叢書の冒頭には「域外叢書」と書かれた扉と王塗による序文がある。完全な、ないし、完全に近い形の『域外叢書』は筆者の確認の範囲では京都大学文学研究科図書館蔵本だけである。同本は2冊から成り、第1冊が『海録』であり、第2冊には8件の短い文献——『海島逸誌摘略』『高厚蒙求摘略』『番社采風図考摘略』『紅毛番啖唎考略』『三宝壠』『崑崙』『爪哇風土拾遺』『呂宋紀略』——が収められている。関大・阪大本版にはない1葉の世界地図が『海録』の序文と本文のあいだに置かれている。

<sup>5</sup> 同本は中国社会科学院歴史学系図書館統合後の時期に重なった関係で残念ながら調査することができなかった。

<sup>6</sup> 域外叢書版は馮注積(1938)のみならず21世紀になって出た安校積(2002a)も Schwarz(2020)も把握していない。しかし、同版の存在は潘(1981, 1982)や陳(1985)に指摘がある。

2冊に分けて綴じられた『海録』の京都大学附属図書館蔵本には「域外叢書」と書かれた扉はないが、王塗の序文がある。同館には『海島逸誌摘略』などを収めた同じ体裁の2冊が別があり、それらは元来『域外叢書』の1組を構成していたものと推定される。ただし、京都大学文学研究科図書館蔵本にはないわずか1葉から成る『台湾紀略 補附』も収められている。

吉林省図書館蔵本は単独の1冊であるが、文面や字形に基づいてやはり域外叢書版であると判定することができる。遼寧省図書館他主編(2003)は同本を「清嘉慶二十五年【=1820年】刻本」と説明しているが、後述の分析からその可能性は考えられない。ちなみに、吉林省図書館の蔵書検索で表示される書誌情報には孫(1936)における「嘉慶庚辰【=嘉慶25年】刊巾箱本」という記載が引用されており、『海録』には巾箱本、すなわち、小型本があったらしいことが分かる。しかし、小型本があったとしても、それが原刊版であったかどうかは不明である。吉林省図書館蔵本も小型本ではない。孫の記述は単なる図書目録の1項目で詳しい説明もなく、資料現物を確かめることなく信用できるものではない。

域外叢書版のうち吉林省図書館蔵本と台湾学生書局から出版された影印本に関して興味を引くのは、篆書体で「海録」と書かれた扉が付いていることである。それは『域外叢書』に含まれる『海録』が単独でも出版されたという可能性を示唆している。そのような扉は関大・阪大本版にも域外叢書版の京都大学蔵本2点にもない。ただし、台湾学生書局刊影印本には『域外叢書』の序文も収められており、状況は不透明である。

域外叢書版は版面の様子が関大・阪大本版によく似ているが、全編を通じて字形が異なることから、新たに板刻された異版であると確実に言うことができる。

### 3) 海外番夷録版

[全3]の「海外番夷録版」は『海外番夷録』(1844(道光24)年)という叢書の一部として収められたものである。『海外番夷録』は『域外叢書』の書名を変えただけのもので、それ以外の内容は両者で共通である。すなわち、2冊から成り、第1冊に『海録』、第2冊に『海島逸誌摘略』その他の資料——『台湾紀略 補附』を含む——が収められている。

ただし、『海外番夷録』はただ『域外叢書』の扉を差し替えただけのものではない。全体に字形が異なり、再び板刻し直された異版であることが分かる。

### 4) 海山仙館叢書版

[全4]の「海山仙館叢書版」は潘仕成編『海山仙館叢書』(1841(道光21)年～)に収められたものであり、『海録』の出版年は域外叢書版などより10年近く遅い1851(咸豊1)年である。

### 5) 謝雲竜序本版

[全5]の「謝雲竜序本版」は筆者は確認できていない。饒(1937)が見たと書いているので、今もどこかに残っている可能性はある。

## 6) 小方壺齋輿地叢鈔版、中外地輿図説集成版

[全6]、[全7]はともに出版は19世紀末で、それぞれ王錫祺編『小方壺齋輿地叢鈔』(1891(光緒17)年)、同康廬編『中外地輿図説集成』(1894(光緒20)年)に収められたものである。

『小方壺齋輿地叢鈔』は原文の記述を多く省いているとする馮注釈(1938)の記述は正しくない。楊炳南の序文は大幅に短縮されているので、馮はそこだけを見て判断したのであろう。本文は関大・阪大本版その他の内容にほぼ完全に一致する。

## 7) 上下巻本版

上巻と下巻の2巻より成る[全8]の「上下巻本版」は数少ない単行本の版の1つである。出版年は記されていない。

## 8) 巾箱本版

[全9]の「巾箱本版」は孫(1936)に記載があるものであるが、現存は知られていない。

## (B) 増補版

## 1) 海国紀聞

増補版と節録版は『海録』の言わば加工物であり、『海録』諸版の相互関係や系譜を考えるうえでは周辺的な存在である。

[増1]の李兆洛『海国紀聞』——成書は1840(道光20)年ごろか——は『海録』に基づいて著されたものであるが、現存を知られていない。兪昌会編『防海輯要』(1842(道光22)年)や『域外叢書』所収の『紅毛番啖咭喇考略』における引用と、後出の叢書『舟車所至』(1843(道光23)年)における節録を通じてその一部を知ることができるだけである。『海録』にない内容も含むが、『防海輯要』に引用されている欧米諸国に関する記述は約20の国名の排列順が『海録』にほぼ一致し、文面にも重複するところが多い。次は英国に関する記述の一節である。本小論では漢字の形も観察の対象とするので、引用には原文で使われている字形を用いる。

國雖小而強兵十餘萬海外諸國多懼之(国は小さいが強兵十余万を擁し、海外諸国に恐れられている。)  
(『海録』全文版)

國雖小而勝兵十餘萬鄰國多畏之 (『防海輯要』における『海国紀聞』からの引用)

## 2) 呂調陽序本版

[増2]の呂調陽による序文を持つ『海録』(1870(同治9)年)は巻一、巻二の2巻より成る。『海録』全文版の内容が「東南洋」(巻一)、「西南洋」「大西洋 小西洋外大西洋附」(以上巻二)という地域区分に従って再配置され、多くの注釈が加えられているほか、全文版にはない日本やロシアなどに関する記述も含んでいる。ベルリン州立図書館蔵本の巻二の末尾には5葉の地図があるが、域外叢書版と海外番夷録版の1葉の地図とは異なるものである。

### (C) 節録版

節録版の範疇に属するものは鄭光祖編『舟車所至』（1843（道光23）年）という叢書に収められた舟車所至版だけである。例えば英国に関する600字余りの記述は300字余りになるなど、文面が大幅に圧縮されている。

『舟車所至』には叢書の扉に「三十年校訛訂正」と記された1850（道光30）年の版もあるが、『海録』の範囲にも変更された箇所があるかどうかは未確認である。

## 4 『海録』諸版の相互関係

以上の各種の版の相互関係は、異体字の差異、誤字、表現の書き換えなどの状況の確認によって探ることができる。

まず、楊炳南の序文と、本文のうち「大西洋國」、すなわち、ポルトガルに関する記述以下の全文に関して文字や表現を比較し、版による差異の認められた主な事例を表2に示す。<sup>7</sup>『海録』の本文は「萬山」<sup>8</sup>に始まり「開於」<sup>9</sup>に終わる90の項目に分けて記述されている。「大西洋國」は71番目の項目であるので、90項目中20項目について調べたことになる。表の最下行は日本の叢書『他山之石』（出版年不明）に収められた『海録』における表記である。

表2 字句の異同

版名	出版年	楊炳南序	大西洋國			佛郎機國	荷蘭國	埔魯寫國	啖唎利國				綏亦咕國	盤黎嗎祿咖啡國	咿哩干國		亞咿哩隔國	哇夫魯他								
			不許入口	欽天監	信伊于第 <sup>*1</sup>				俾厥共知	酒亦極佳	廟宇	與中國 <sup>*2</sup>			六十以上	禁令			娼妓	博咕魯士 <sup>*3</sup>	供其飲食	各返其國	綏亦咕	約旬餘	綏亦咕	海島
全文版	[全1] 闕大・阪大本版	不明	陳	入口	天	于	共	佳	字	與	上	令	娼	博	供	各	咕	旬	咕	島	咿	稍狹	輪	地名	薯	
	[全2] 城外叢書版	1842	陳	入口	天	于	共	佳	字	與	上	令	娼	博	供	各	咕	旬	咕	島	咿	稍狹	輪	地名	薯	
	[全3] 海外番夷録版	1844	陳	入口	王	干	其	佳	字	與	土	令	娼	博	供	各	咕	旬	咕	島	咿	稍狹	輪	地名	薯	
	[全4] 海山仙館叢書版	1851	澳	入口	天	干	共	佳	字	與	上	令	娼	博	供	各	咕	旬	咕	島	咿	稍狹	輪	地名	薯	
	[全6] 小方壺齋輿地叢鈔版	1891	一	入口	天	於	共	佳	字	同	上	令	娼	博	供	各	古	旬	古	島	芋	廣袤	輪	地名	薯	
	[全7] 中外地輿図説集成版	1894	一	入口	天	於	共	佳	字	同	上	令	娼	博	供	各	古	旬	古	島	芋	廣袤	輪	地名	薯	
	[全8] 上下巻本版	不明	陳	八日	天	于	共	佳	字	同	上	合	娼	博	供	各	口	占	旬	占	島	咿	稍狹	輪	地名	薯
	増補版	[増2] 呂調陽序本版	1870	一	入口	天	一	共	一	字	如	上	令	娼	一	供	各	古	旬	古	島	咿	稍狹	輪	一	薯
[節1] 舟車所至版		1843	澳	入港	天	一	一	佳	一	一	上	一	娼	一	一	一	古	一	古	島	咿	一	一	一	薯	
その他	防海輯要（海國紀聞からの引用）	1842	一	一	天	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	古	一	古	島	洋	一	一	一	爲	一	
	海國図志50巻本	1844	一	入口	天	一	共	一	字	如	上	令	娼	一	供	各	古	旬	古	島	咿	稍狹	輪	一	薯	
	他山之石版（和刻本）	不明	陳	入口	王	于	共	佳	字	與	上	令	娼	博	供	各	口	占	旬	占	島	咿	稍狹	輪	地名	薯

注 \*1 ポルトガル語senador（英senator）の音訳（Ch'en(1942)）。

\*2 文脈を拡大して示せば「天氣益寒男女穿皮服彷彿與中國所披雪衣夜則以當被」。

\*3 英語bucklesの音訳（Ch'en(1942)）。

\*4 文脈を拡大して示せば「由沿你路西行十餘日地名埋衣哪」。

<sup>7</sup> 再版時に互いに入れ替わりやすい「土」と「士」、「于」と「干」と「千」の差は除外した。

<sup>8</sup> 安校積(2002a)によれば「萬山」は広東省の南部沿海にある万山諸島を指す。馮注積(1938)によれば、『海録』の記述が「萬山」に始まるのは昔時外国に向かう船が常に広州から出発したことによる。

<sup>9</sup> 馮注積(1938)の推定によれば、「開於」はKurileの音訳で、千島列島を指す。

表2の最上部に記した「大西洋國」から「亞咩哩隔國」に至る地名は順にポルトガル、フランス、オランダ、ロシア、英国、スウェーデン、デンマーク、米国、南米（ないしブラジル）であり、「哇夫島他」は南洋の8島を指す（馮注釈(1938)、Ch'en(1942)、安校釈(2002a)）。<sup>10</sup>

表では、原刊版に近いと見られる[全1]、[全2]を基準として、個々の版において誤字になっているものと別の表現に改められているものの背景を暗い灰色にしている。明るめの灰色は異体字を示す。ただし、異体字の差はときに微妙で連続的である。「A/B」という形の記入は「A」と「B」のいずれであるとも判定しがたい中間的な字形であることを示している。

#### 4.1 字句の異同等と諸版の相互関係

諸版における異体字、誤字、表現の変更などの観察から以下のようなことが分かる。

##### (A) 全文版

###### 1) 関大・阪大本版

総合的に判断して、ここで考察の対象としている版のうちで、最も古く、かつ、最も信頼性が高いと考えられるのは関大・阪大本版である。その推定が正しければ、遅くとも『域外叢書』の出版された1842（道光22）年までに出版されたことになる。

筆者の確認の範囲において誤字と言える可能性のある例は、「佛郎機國」（フランス）の項目における「酒亦極佳」の「佳」の偏と旁がつながって「隹」のような形に書かれているものだけである。もともと、「佳」に見えなくもない字形であり——水平の4画の長さが「圭」のように上から短長短長となっている——、純然たる誤字というわけではない。また、「綏亦咕國」（スウェーデン）の「咕」が「𠵼」に見える字形で書かれているが、「盈黎嗎祿咖國」（デンマーク）の項目中では正しく「咕」と書かれている。ほかに、「佛郎機國」で「尢」が「尢」という字形で書かれているが、これは一般的な中国語の辞書に載っており、単なる異体字のようである。

###### 2) 域外叢書版

域外叢書版では「佳」は「佳」、「尢」は「尢」と書かれているが、「薯芋」が誤って「著芋」とされているほか、「俾眾共知」（人々に周知する）の「共」と「供其飲食」（遭難者に飲食物を与える）の「供」に次に見るように「廿」という形の要素を含む字形が使われている。

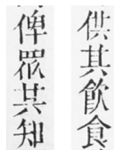


図1 域外叢書版の「共」「供」<sup>11</sup>

<sup>10</sup> 「埔魯寫國」は、その表記を信用すれば馮と安の言うようにプロシアであるが、別名として示された「嗎西噶比」はモスクワ（Muscovy）であろうから Ch'en(1942)の言うようにロシアであろう。

<sup>11</sup> 画像は『中国史学叢書続編 中国南海諸群島文献彙編之三』（台湾学生書局、1975年）所収の影印



## 3) 海外番夷録版

海外番夷録版では上記の「共」「供」がそれぞれ「其」「俱」という誤字に変わっている。これは、域外叢書版における「廿」を含む字形が誤解を生じた結果であろう。すなわち、関大・阪大本版の「共」「供」が域外叢書版で図1に見る字形で書かれ、それが海外番夷録版における「其」「俱」という誤記を引き起こしたという変化の過程を推定することができる。これも、関大・阪大本版が域外叢書版に先行する版であるという判断の証拠の1つになる。

海外番夷録版はほかにも「天」を「王」、「博」を「傳」、「各」を「名」、「旬」を「句」、「軸」を「輔」と書き誤るなど、最も誤字の多い全文版である。

## 4) 海山仙館叢書版

海山仙館叢書版は誤字が少なく、したがって、海外番夷録版より後に出版されたものではあるが、関大・阪大本版か域外叢書版のいずれかに基づいていると考えられる。中国語の知識で分かる通常の語句に関わる誤字は編集者の判断で訂正することができるので、海外番夷録版の誤字が海山仙館叢書版で訂正されたということも考え得るが、しかし、buckles を表す音訳語「博咕魯士」が海外番夷録版で「傳咕魯士」に変わったのを著者以外の人物が訂正することはまず不可能のはずである。

底本が関大・阪大本版か域外叢書版かという問題については判断の材料が乏しいが、米国を表す「咩哩干國」(American 国)の第1字が域外叢書版では「咩」という異体字で書かれ、海山仙館叢書版は関大・阪大本版と同じく「咩」を使っているので、もしそのことを重視してよとすれば関大・阪大本版に基づいている可能性が相対的に高いことになる。

なお、海山仙館叢書版では「亞咩哩隔國」(America 国、南米ないしブラジル)の項目における原文の「由沿你路西行十餘日地名埋衣哪」の「地」が「至」に変更されている。おそらくこれは本来正確に書けば「由沿你路西行十餘日至地名埋衣哪」(沿你路から西に10日余り行くと埋衣哪という名の地に至る)などのようになるべきもので、編集者は原文の表現に問題があると見て改めたのであろう——ただし、変更の結果もまた文法的におかしい<sup>12</sup>——。『防海輯要』に『海国紀聞』から引用された一節においては「由沿爾路又西行十日爲梅衣耶」と書き換えられている。

---

による。

<sup>12</sup> Ch'en(1942)は「名埋衣哪」の4字を地名と解釈している。そう考えれば海山仙館叢書版の「至名埋衣哪」は文法上問題がないことになる。しかし、当該の文だけを見て判断するのではなく、『海録』の全体に目を通して同類の表現を確かめれば本来正しい文面はやはり「地名埋衣哪」で、「埋衣哪」が地名であることが分かる。例えば、「啖咕喇國」(英国)の項目に含まれる「由口入舟行百餘里地名論倫」(テムズ川の)河口に入って舟で百里余り行くとロンドンという名の地に至る)という文は「由沿你路西行十餘日地名埋衣哪」と共通の表現型によっている。また、「淫跛鞏國」(馮注釈(1938)によればローマ帝国)の項目における「各國交界處有地名郎嗎」(各国の接するところにはローマという名の地がある)においても“～という名の地”が「地名～」と表現されている。

## 5) 小方壺齋輿地叢鈔版

小方壺齋輿地叢鈔版には「傳咕魯士」の誤記があることからおそらく海外番夷録版に基づいているものと考えられる。ただし、形の似た字の混同はいつでも起きる可能性があるため、確実にそう言えるわけではない。

『小方壺齋輿地叢鈔』は文献の収録に際して音訳語の口偏をほぼ一律に省いており、「咩(咩)哩干國」の「咩(咩)」——広東語での発音は me1——まで発音のまったく異なる「羊」——広東語発音 joeng4——に変えようとし、しかも、実際にはそれをさらに誤って「芋」と書き——広東語発音 wu6、jyu1——、加えて、「干」も「千」に誤って「芋里千國」と書いたために、原音からかけ離れた表記になってしまった。<sup>13</sup>

記述の内容に介入したところもあり、米国の項目における「海中孤島也」(海中の孤島である)というくだりを削除するとともに、「疆域稍狹」(国土がやや狭い)という説明を「疆域廣袤」(国土が広大である)に書き換えている。

## 6) 中外地輿図説集成版

中外地輿図説集成版の内容は小方壺齋輿地叢鈔版のそれに高度に一致する。例えば、短縮して収められた序文の文面が一致している、西洋の国名の多くに小字で添えられた注釈——例えば、「大西洋國<sup>即葡葡</sup>又名布路幾士」における小字の部分<sup>14</sup>——が両者でほぼ一致する、上述の「芋里千國」や「疆域廣袤」が共通している——ただし、「芋」の字形は若干異なる——などの、偶然によっては生じ得ない多数の共通要素がある。小方壺齋輿地叢鈔版における項目の排列順の誤りがすべて中外地輿図説集成版にも見られ、後者では誤りがさらに増えているという事実もある。出版年の先後を考へても、小方壺齋輿地叢鈔版に基づいて中外地輿図説集成版が編まれたものと考えられる。

## 7) 上下巻本版

上下巻本版は、楊炳南の序文で「澳門」(マカオ)がそのように書かれている、「綏亦咕國」の第3字が「咕」のような字形で書かれている、「咩哩干國」がそのように書かれているなどの事実から、おそらく関大・阪大本版に基づいていると推定される。

## (B) 増補版

## 1) 海国紀聞

李兆洛『海国紀聞』は『防海輯要』(1842(道光22)年)や『域外叢書』(同年)所収の『紅

<sup>13</sup> 広東語の発音の表記は香港語言學學會<sup>香港語言學學會</sup>粵語拼音方案(略称粵拼)による。各文字の音価は普通話のピンインに準じるが、jは国際音声記号(IPA)におけるように半母音を表す。また、yuはピンインのüに相当し、母音[y]を表す。数字1~6は声調を表す。

<sup>14</sup> 「葡萄芽」は原文の通りである。19世紀中国の文献にはその表記が散見される。

毛番啖咭喇考略』に引用されていることから、出版時期上おそらく関大・阪大本版に基づいていると考えられる。

## 2) 呂調陽序本版

呂調陽序本版は表2に見る限りでは全文版と特に異ならないが、実際には字句や文面の差異が非常に多い。そして、筆者の見るところによれば、この版は相当に疑わしい性質のものである。すなわち、一見全文版に基づいてその記述に注釈を加えたもののように見えるが、実のところその内容の圧倒的大部分が『海国図志』の記述を編集したものに過ぎない。

表2の範囲においても、大半の版における「與」ないし「同」が呂調陽序本版と『海国図志』では共通して「如」になっている。そして、さらに次のような例を見れば、呂調陽序本版が『海録』の本文を全文版ではなく『海国図志』から取っていることが明らかである。これは南洋8島に関する項目の開始部分である。字句の変更、変化のうち異体字による代替に過ぎない箇所については加点を省く。

哇夫島 哇希島 匪支島 唵你島 千你島 蔦格是 哪韋吧 亞哆歪以上八島俱在東海(哇夫島、哇希島、匪支島、唵你島、千你島、蔦格是、哪韋吧、亞哆歪。以上の8島はいずれも東海にある。)

(関大・阪大版、域外叢書版、海外番夷録版)

東洋諸島曾歷其地者曰(東洋諸島のうちかつて人が訪れたことのある島の名は) 哇大島哇希島匪支島唵呢島千尼島蔦格是島那韋巴島亞多歪島以上八島俱在東海

(『海国図志』50巻本、巻十二「東南洋 附東南洋諸島形勢」)

東洋諸島曾歷其地者曰哇大島哇希島匪支島唵呢島千尼島蔦格是島那韋巴島亞多歪島以上八島俱在東海 (呂調陽序本版)

こうした文面の差異が生じるのは、『海国図志』は他の文献からの引用時にしばしば原文を改変していることによる(拙論(2019))。

『海録』の本文が『海国図志』に基づいているだけではない。呂調陽序本版の随所に小字で加えられた注釈のうち字数の多いものは、その大半が『海国図志』における他の文献からの引用の孫引き——しばしば文面の圧縮を伴う——である。

呂調陽序本は「重刻海録序」と題された序文を有し、そこに『海国図志』への言及はない。しかし、同書は『海録』を普通の意味で“重刻”したものではなく、『海国図志』中に分散して引用された『海録』の章節を寄せ集め、それに『海国図志』のほかの内容——大半は他の文献からの引用——や編者の準備した内容を小字の注釈の形で付け加えるという方法で編まれたものである。

呂調陽序本版は『海録』の記述を「東南洋」「西南洋」「大西洋 小西洋外大西洋附」という地域区分に従って引用していることを先に述べたが、それも編者の創意によるものではなく、単に

『海国図志』の編成に従ったものである。また、『海録』にはない日本などに関する記述が付加されているのは一見独自の準備によって内容の充実を図っているかのように見えるが、実はそれらもまた『海国図志』の記述を複製したものに過ぎない。

安校積(2002a)は“呂序本は『海録』の内容を深く研究して大量の専門的な注釈を加えており、『海録』の最も重要な版の1つと言える”と述べているが、呂調陽序本版はとうていそのような評価に値するものではない。安が本文において“呂序本作～”(呂序本は～と表現している)、“呂序本注～”(呂序本は～と注記している)などの形で加えている大量の注釈はそもそも価値が乏しく、もし書くにしてもその大多数は本来“『海国図志』作～”、“『海国図志』曰～”のように説明すべきものであった。安の注釈は、呂調陽序本版が底本の『海国図志』から継承した要素と独自に加えた要素を区別せず同等のものとして扱った形になっている。

『海国図志』には複数の版があるが、呂調陽序本版はそのうちのどれを底本として用いたのであろうか。それを知る手がかりは、呂調陽序本版の注釈に関わる否定的な事実にある。すなわち、『海国図志』50巻本(1844(道光24)年)が依拠している『四洲志』『東西洋考』『職方外紀』『海国聞見録』『海島逸志』『毎月統紀伝』『美理哥合省国志略』『貿易通志』などの相対的に古い——具体的に言えば、1840(道光20)年ごろまでに出版された——文献の記述は注釈に多数引用されているが、他方、『海国図志』60巻本(1847(道光27)年)で初めて使われた『万国地理全集』や100巻本(1852(咸豊2)年)で初めて使われた『地理備考』『外国史略』などの記述は引用されていない。<sup>15</sup> そのことから、呂調陽序本版は『海国図志』50巻本を底本としているものと推定される。

それにしても、呂調陽序本版の注釈に『四洲志』その他の文献名は繰り返し現れるものの、『海国図志』の名は序文にも本文中の注釈にも一度として出て来ないというのは不審である。あたかも『四洲志』その他から直接に引用しているかのような書き方になっている。このようなことでは、呂調陽序本の編者はそれを『海国図志』に頼って編んだことを隠そうとしているとする解釈、批判を免れないであろう。もっとも、少数の注釈に「魏云～」などの形で魏源の名を出しているのが、必ずしも単純にそう言い切れるわけでもない。

### (C) 節録版

節録版の舟車所至版では文面の量が少ないためにほかの諸版との字句の違いも少なく、底本とされた版は不明である。

「亞咩哩隔國」の項目では「由沿你路西行十餘日地名埋衣哪」の「地名」の2字が「至」に変更されている。海山仙館叢書版でも類似の変更が見られたが、そこでは「地」が「至」で置き換えられていた。いずれにせよ、舟車所至版は海山仙館叢書版より出版が早いので、共通の

---

<sup>15</sup> 文中に挙げた文献名はすべて『海国図志』と呂調陽序本版で使われているものである。一部に実際の書名とは若干異なるものがある。

「至」への変更は偶然の産物だと見られる——直後の文脈に「又西行十餘日至彼咕噠哩」というくだりがあり、それが各版において「至」への書き換えの動機になった可能性がある——。

#### (D) その他

##### 1) 海国図志

呂調陽序本版の底本として使われたと考えられる『海国図志』50巻本（1844（道光24）年）の編集に『海録』のどの版が使われたかを示す字句上の証拠は見出せていない。しかし、『海国図志』50巻本の序文に道光22年12月（1843年1月）という時間が記されているので、原稿がそれまでに完成したと解釈すれば、底本はここで確かめることのできた版の範囲で言えば関大・阪大本版、さもなくば域外叢書版であることになる。

##### 2) 他山之石版

和刻本の他山之石版は、「大西洋國」の項目における「欽天監」——天文や暦法を司る官署の名称——が誤って「欽王監」と書かれているなどの事実から、同じ誤りを含む海外番夷録版に基づいていることが分かる。同じく海外番夷録版に基づくと見られる小方壺齋輿地叢鈔版の編集時には誤記として訂正されたが、日本人による翻刻時には誤りが気付かれず、訂正されなかったということであろう。

#### 4.2 『海録』諸版の系譜

以上の考察を通じて明らかになった『海録』諸版の派生関係の全体、系譜を図示すれば図2のようになる。ここでは、呂調陽序本版の系譜上の位置付けを示す必要上、『海録』の版とは言えない『海国図志』も含めている。また、底本の明らかでない節録版の舟車所至版は省いている。

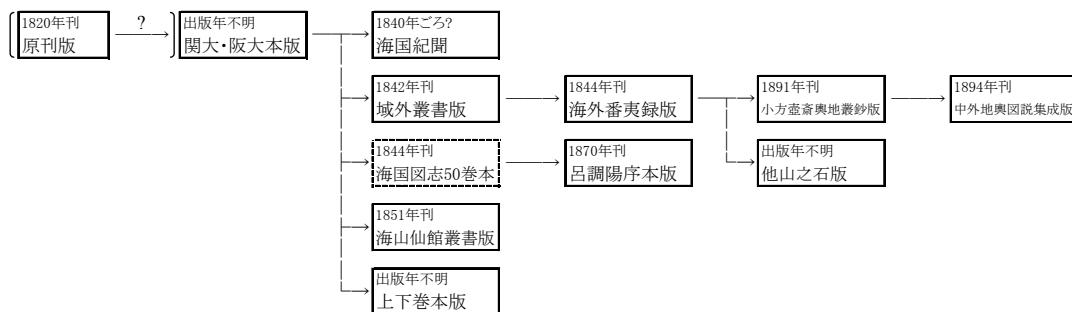


図2 『海録』諸版の系譜

#### 5 関連の問題2件

最後に、『海録』諸版の系譜の理解をふまえて、先行研究における関連する2つの問題に触れておく。

### 5.1 後人による増補?

馮注釈(1938)は海山仙館叢書版の目次に関して次のように述べている——同注釈書に頼って考察した井上(1986)もここに述べられた想像を引用している——。

海山仙館叢書本獨有目錄。(中略)細目遺漏打拉者尖筆闌二條。殆亦爲後人所增。非原刻本所有。(海山仙館叢書本にのみ目次がある。目次の細目では「打拉者」と「尖筆闌」の2項目が漏れている。両者はおそらく原刊版にはなかったもので、後人によって加えられたのであろう。)

しかし、原刊版を参照できない状況にあつて、なぜそのようなことが言えるのか。この問題は、馮が『海録』諸版の相互関係を把握しない状態で海山仙館叢書版を信頼し、考察の基礎に据えていることに関わっている。

事実は単に、海山仙館叢書版はそれまでの『海録』の諸版にはなかった目次を巻頭に付け加えたが、その際に「打拉者」と「尖筆闌山」<sup>16</sup>の2項目が漏れたということに過ぎない。そして、その漏れが生じた理由も明らかである。すなわち、いずれの項目も直前の項目の最終行の末尾に偶然空白がないために——関大・阪大本版などでも海山仙館叢書版でもそうになっている——、そこに項目の切れ目があることが見落とされたということである。

当該の2項目はここで確認できたすべての全文版にある。それらが原刊版になかったという可能性を示唆する事実はない。

### 5.2 地図と版の関わり

もう1つの問題は、域外叢書版と海外番夷録版にある世界地図に関するものである。

当の地図は一見して捏造の要素を含むと分かるもので、『海録』の本文に記述された国、地域の名をほぼその順にきわめて不正確な地図の数か所の海岸に沿って記入してあるに過ぎない。馮が次のように述べている通りである。

海外番夷録本獨有圖。蓋雜採職方外紀海國聞見録及本書諸地名繪製而成。不知出何人手。(中略)此圖甚陋。直漫畫耳。未足以資考證。(海外番夷録本にのみ地図がある。これは(より古い17世紀、18世紀の地理書である)『職方外紀』と『海国聞見録』(の地図)と『海録』に書かれた諸地名を組み合わせ描いたものであろう。誰が描いたものかは不明である。きわめて粗雑に描かれた地図で、考証の材料にはならない。)

地図は、関大・阪大本版にないことから考えて、『域外叢書』出版時に準備されたものと推定される。

Schwarz(2020)は『海録』本文に現れる諸地名が地図上のどこに記入されているかを確かめて

---

<sup>16</sup> 馮が「尖筆闌」と書いている地名は正しくは「尖筆闌山」である。

いる。<sup>17</sup> Ptak(2021)はそれを受けて、“地図はおそらく楊炳南が描いた”としたうえで、謝清高の航海の経路をさらに詳しく論じようとしている。いずれも『海録』諸版の相互関係を考えていないことから、地図が原刊版に由来し価値を有するものだと思っただのであろう。しかし、地図は第三者による無責任な創作物に過ぎず、現に地名の相対位置の誤りも認められる。馮も言う通りこれに基づいて何かを明らかにすることは望めない。もし『海録』に基づいて航路などを考えるというのであれば、まずその本文に記された諸地名がどこを指しているかを明らかにし、それを現代の正確な地図上に位置付けて考察するというのが有効性を期待し得る唯一の方法であろう。

## 6 おわりに

『海録』の諸本の観察と分析に基づいて、版の種類とその相互関係を考察した。そして、確認の限りにおいて、関西大学図書館増田渉文庫蔵本と大阪大学附属図書館蔵本の信頼性が最も高く、原刊版であるか、もしくは、それに最も近い版であるとの結論を得た。

筆者が字句の異同の分析対象としなかった本文の章節、また、参照することのできなかつた諸本にも調査の範囲を広げることによって、『海録』の版の問題に関する理解が今後さらに正確なものになることを期待したい。

なお、『海録』から多数の章節を引用し、かつ、それが呂調陽序本版の編集にも使われている魏源『海国図志』の版の問題についても浅い水準の理解が定説化している。それについては拙論(2023)で論じた。併せて参照願いたい。

## 文献

- 井上裕正(1986)『『海録』小考』『奈良女子大学文学部研究年報』第29号
- 田野村忠温(2019)「言語研究資料としての近代中国地理文献彙集の信頼性—『海国図志』と『小方壺齋輿地叢鈔』—」『或問』第36号
- 田野村忠温(2020)「ドイツ国名『独逸』成立の過程とその背景—社会的条件と日本語における音訳語の特異性—」『東アジア文化交渉研究』第13号 (関西大学大学院東アジア文化研究科)
- 田野村忠温(2021a)「音訳語における口偏の機能について—一口偏蔑視表示説の検討—」『或問』第40号
- 田野村忠温(2021b)「音訳語『珈琲』の歴史」『阪大日本語研究』33 (大阪大学大学院文学研究科日本語学講座)
- 田野村忠温(2023近刊)「『海国図志』版問題新論—従来未知の版区別の発見とその含意—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第63巻
- 安京校释(2002a)『海録校释』(商务印书馆)
- 安京(2002b)「关于《海录》及其作者的新发现与新认识」『海交史研究』2002年第1期(中国海外交通史研究会・泉州海外交通史博物馆)

<sup>17</sup> 当該の地図に関わる議論も編者 Martin Hanke による。

- 安京(2003)「《海录》作者、版本、内容新论」『中国边疆史地研究』2003年第1期(中国社会科学院中国边疆研究所)
- 陈胜彝(1980)「鸦片战争前后中国人对美国的了解和介绍(上)——兼论清代闭关政策的破产和开眼看世界思潮的勃兴」『中山大学学报(哲学社会科学版)』1980年第1期
- 陈胜彝(1985)「关于林则徐研究的若干史实补正」『中山大学学报(哲学社会科学版)』1985年第3期
- 馮承鈞(1937)「海錄筆受者究屬何人」『禹貢』第6卷第8・9合期(禹貢學會)
- 馮承鈞注釋(1938)『海錄注』(商務印書館)
- 蒋祖缘・方志钦主编(1993)『简明广东史』(广东人民出版社)
- 遼寧省圖書館・吉林省圖書館・黑龍江省圖書館主編(2003)『東北地區古籍綫裝書聯合目錄 一』(遼海出版社)
- 潘君祥(1981)「《海录》——我国近世第一本介绍世界各国概况的专著」『上海经济研究』1981年第7期(上海社会科学院经济研究所)
- 潘君祥(1982)「我国近世介绍世界各国概况的最早著作——《海录》」『社会科学战线』1982年第2期(吉林省社会科学院)
- 邱敏(1986)「《海国闻见录》与《海录》述评」『史学史研究』1986年第2期(北京师范大学史学研究所・北京师范大学古籍研究所)
- 饒宗頤(1937)「海錄筆受者之攷證」『禹貢』第6卷第10期(禹貢學會)
- 沈雲龍主編(1986)『近代中国史料叢刊3編 第17輯 林文忠公(則徐)奏稿』第2册(文海出版社)
- 孫殿起(1936)『販書偶記』(借間居鉛印)
- 周桓(1983)「一部有关南海交通史的资料书《海录》」『河北大学学报』1983年第3期
- Ch'en, Kenneth (陳觀勝) (1942) 'Hai-Lu 海錄, Fore-runner of Chinese travel accounts of Western countries', *Monumenta Serica*, Vol.7, Fasc. 1 & 2. Beijing: The Catholic University of Peking.
- Ptak, Roderich (2021) 'Book review: *Aufzeichnungen über die Meere. Hailu 海錄.*', *Monumenta Serica*, Vol. 69, No. 1. Sankt Augustin: The Monumenta Serica Institute.
- Schwarz, Rainer (2020) *Aufzeichnungen über die Meere (Hailu 海錄): Niedergeschrieben von Yang Bingnan, nach dem mündlichen Bericht von Xie Qinggao. Übersetzt und mit einer Einführung von Rainer Schwarz, herausgegeben von Martin Hanke, mit einem Vorwort von Hartmut Walravens.* Großheirath: Ostasien Verlag.

謝辭 『海錄』の吉林省図書館蔵本の調査に関しては北京外国語大学歴史学院院長李雪濤教授、大阪大学大学院文学研究科(日本語学)学生張梓旋さんを始めとする方々の支援を得た。記して謝意を表したい。